

『史記』と『項羽と劉邦』の比較研究—司馬遼太郎の劉邦像—

A Comparative Study
of
Shiji and Koou and Ryuhou
—Ryotaro Shiba's Image of Ryuhou—

森 豪* 鳥 明**

Tsuyoshi Mori Wu Ming

Abstract The pen name, Ryotaro Shiba shows his great respect to Sima Qian who influenced him so much. Ryotaro's novel, *Koou and Ryuhou* is based on Sima Qian's *Shiji*. Ryotaro neither gives the outline of *Shiji* nor adapts its story superficially. He tries to look at the world where Ryuhou lived through Qian's eyes and reconstruct Ryuhou's world fundamentally by his own imagination. The world created by Ryotaro is unrefined and uncouth, which bears some resemblance to Osaka where Ryotaro lived. Ryotaro tries to give a clear image of the world and describes it in plain language. To look at plain facts and put them in plain language is the most important for Ryotaro who were forced to go to the battlefield by the military authorities of the Pacific War who concealed facts under sensational expressions.

1. はじめに

『史記』を書いた司馬遷に遠かに及ばないという意味の「司馬遼太郎」をペンネームとして、福田定一は昭和31年に「ペルシャの幻術師」を書いた。「司馬遼太郎」というペンネームの使用は、常に司馬遷との繋がりに自分を置くという覚悟を示したものと考えることができる。その繋がりのなかから、司馬遼太郎は、昭和52年から昭和54年にかけて「小説新潮」に、『史記』に直接取材した小説「漢の風、楚の雨」を連載し、『項羽と劉邦』と改題して昭和55年に出版した。『項羽と劉邦』に於いて、遼太郎が司馬遷の世界をどのように受け止め、遼太郎らしい世界を創造したのか、その考察が本稿の目的である。

『項羽と劉邦』の「あとがき」で、遼太郎は司馬遷について「かれは宋代以後の学者よりもはるかにこんにち的な感覚をもち、二十世紀に突如出てきても違和感なく暮らせるほどに物や人の姿を平明に見ることができた」(下35)¹⁾と述べている。「平明

に見ること」は、本編のなかで「司馬遷は、容赦もないほどの露骨さで書いている……かれの観察態度は、酷なほどに冷徹である」(上75)といわれていることに関係しているように思われる。この遼太郎のとらえた司馬遷の態度について考察することから、始めたい。

2. 司馬遷の観察態度

司馬遷の観察態度について、田中謙二氏と一海知義氏は、次のように述べている、

『史記』の完成に至るまでには、ともかくも以上の経緯が秘められていた。このような経緯のもとに生まれた『史記』が、単なる歴史の書物で終るはずがあるか。

いわば、漢の武帝朝の一史官であった司馬遷は、宮刑に遭ったその時すでに死滅し去り、ここに「人類の史官」——時間と空間を超越した人間の記録者としての司馬遷が、誕生する。史官が栄光にかがやく職掌であるのは、常に客観的な立場で事実をありのままに記載しうるからである。²⁾

*愛知工業大学 基礎教育系 (豊田市)

**東南大学 (南京市)

司馬遷のものを見る態度は、「客観的な立場で事実をありのままに見る態度であるといわれている。史官が尊ばれるのは、その眼を持つからだともいわれている。司馬遷が、特に卓越した形でその眼を得るに至るのには、ここにいわれるような宮刑という「過酷な体験」が関係している。

司馬遷は、『史記』最終巻(巻百三十)の「太子公自序」に於いて、自分の家系や生い立ちから始めて『史記』の完成に至るまでの過程を自らの言葉で語っている。それを中心に司馬遷の生から「過酷な体験」までを辿ってみたい。

司馬の家系は、周王室以来の史官の家系である。史官は、王室関係の記録者であるとともに、天文・祭祀・律歴を司る。司馬遷は、周から晋を経て秦に使えた司馬家の直系で、父の司馬談は、秦の史官である太史令に就任した。司馬遷は自分の生年を述べていない。異説もあるが、³⁾生年は景帝の中元五年(BC145)で、生地は現在の陝西省韓城県である。十歳で古文を暗誦するほど早熟な知的生活を送り、二十歳頃に初めて長途の大旅行を敢行した。さらに旅行はもう一度行われ、これらの旅行は『史記』の内容に豊かな肉付けを与えることになる重要な経験であるが、二度目の旅行から帰った司馬遷を待っていたのは、『史記』の成立に決定的な影響を与える事件であった。

元封元年(BC110)に武帝は、天の子として天地を祭る「封禪の礼」をおこなった。その行事に参加を許されなかった司馬談は、憤りのために死ななばかりの状態となり、枕頭に息子の司馬遷を呼び寄せて「わしが死んだら、そなたはかならず太史になるだろう。太史になったら、わしが論著しようとのぞんだところを忘れないでくれ」(『史記』下348)⁴⁾と遺言した。司馬談の「のぞんだところ」というのは、孔子の『春秋』を継ぐ歴史書を書き、孔子の時代以降四百年の空白を埋めることであった。司馬遷は、父の死後三年目の元封三年(BC108)に太史令になった。父の遺言を守るべく、過去の史官の記録や諸種の文献を収集し、太初元年(BC104)に『史記』の執筆を始めた。

「過酷な体験」とは、「李陵の禍」と呼ばれるもので、執筆開始後七年目のことであった。漢帝国が安定すると武帝は北辺の匈奴討伐を企てた。戦闘を繰り返すあいだに、李陵という指揮官が敗北し、降伏した。李陵に批判が集中するのに対し、司馬遷が

弁護をした。それが武帝の不興を買い、獄舎に閉じ込められ、ついには死刑を宣告された。死刑を免れるには金を納めるか、宮刑(生殖器の切断)を受けるという方法があったが、金のない司馬遷は最大の恥辱とされる宮刑を受け入れた。恥辱に苛まれても司馬遷は生きぬくことを選び、「人はみな心に鬱結するところがあって、その道を通ずることができないゆえに、往事を述べて未来を思うのだ」(『史記』下350)と思い定め、太始元年(BC96)に釈放後、太史令に復帰し、『史記』執筆を続け、遂に『史記』(当初は『太史公書』と呼ばれた)を完成した。

ここで指摘しておかねばならないのは、「客観的な立場で事実をありのままに見る眼は、以上のような「過酷な体験」を経て、研ぎ澄まされたことは確かであるが、その見方がその体験で初めて生まれたということではないということである。それは司馬遷の基本姿勢として当初からあったものである。

「太子公自序」で司馬遷は、「わたしは、いわゆる故事を述べて、世々伝わるところを整齐しようとするのでして、いわゆる創作するわけではありません。それですのに、あなたがこれを春秋と比較なさるのは謬りです」(『史記』下350)といっている。この姿勢で『史記』の執筆を始めて七年目に「李陵の禍」に遭遇したといっている。司馬遷の意図を貝塚茂樹氏が分かりやすく次のようにい換えている、

・・・わたしのいう歴史は、批判のそれではなくて、資料を収集し整理することによって成立する歴史なのである。孔子のいわれる、古いことを「述べる」、つまり整理することであって、けっして「作る」ことではないのである——と。だから、司馬遷の立場は、予言の書、批判の書を編もうというのではない。それは孔子の意図した歴史である。『春秋』ではなくて、いわば客観的な科学的な歴史叙述という立場にあることを明らかにしているのである。⁵⁾

父の遺言を守り、孔子の『春秋』を継ぐのであるが、『春秋』は「予言の書、批判の書」であって、司馬遷の意図するものではない。司馬遷の意図するのは、「資料を収集し整理すること」であり、それを貝塚氏は「客観的な科学的な歴史叙述」といっている。「批判の書」ではないと言うものの、司馬遷は随所で批判をしている。そして資料の収集にして

も田中・一海氏の指摘するように、⁶⁾ その選択には主観が入っている。「作る」要素を否定することはできない。しかしここで重要なのは、これは司馬遷のものを見る基本態度の表明であるということである。

「太子公自序」には、その思想的背景にも触れられていて、司馬談の言という形で、道家の思想をよしとすることが述べられ、その思想が次のように解説されている、

道家の学の要諦は、無為（清浄を守って作為しない）であり、無不為（なさざるなし。功大にして万物を生育する）である。・・・その術は虚無を根本とし、自然にまかせることを作用としている。（『史記』下347）

ここに述べられた「虚無」と「自然にまかせること」を、ものの見方に関連させてみると、自己を虚無の状態にして、自然のままに、あるがままに、客観的に見ることと言える。そしてそれが、遼太郎のいう「平明に見ること」である。

3. 司馬遼太郎の観察態度

自己を虚無にしてあるがままに見るといのは、遼太郎の基本的立場でもある。遼太郎は次のようにいっている、

物を見るというのは、自分を極小にまで縮めて行って、できれば空の一点になりおおせるときが、もっとも鮮やかに見えることでしょう。⁷⁾

司馬遷の見方を徹底させたものが「過酷な体験」であったように、遼太郎のこの見方を徹底させたものも太平洋戦争という「過酷な体験」であった。

遼太郎は、太平洋戦争中に戦車連隊に所属した。戦車の中で敵を待った体験について次のようにいう、

・・・敵戦車が出現した瞬間が私の死の瞬間になるはずでした。・・・自己を極小へ縮めてゆかねば、勝ちの可能性がゼロという戦車に同一化できず、そして極小化してゆく自己が、国家とか日本とかいうのは何かということを考えこむうちに、・・・国家というものの奇妙な姿態や、それを狂

態へ駆り立てている架空の、それだけに声高に叫び、国民に脅迫をもって臨まざるをえない思想というものがよくわかるような気がしました。⁸⁾

戦車の中で自己を縮小した「空の一点」になって「国家とか日本とは何か」と思い、その思いの中に「明治国家が、音をたてて崩れてゆく光景」が映じ、この「空の一点」の体験が契機となって、遼太郎は明治国家成立前後に興味をもつようになったらしい。

明治国家成立前後は、遼太郎の生涯のテーマであったが、本格的に取り組んだ最初の作品は『竜馬がゆく』（昭和37年～昭和41年）であった。そこで竜馬について「妙な学問をしていないだけに、ものを平明にみることができた」⁹⁾ と言い、『坂の上の雲』（昭和43年～昭和47年）では、正岡子規について「銜いや気おいをおしころすことによってひたすらに目を平明にし、ひたすらに適確な写生の姿勢をとろうとする子規」¹⁰⁾ といっている。

「平明」という語は、『広辞苑』によれば、「平易ではっきりしていること。公平なこと。夜明け」という意味をもつ。『国語大辞典』（小学館）には、「わかりやすく、はっきりしていること」という意味に「平明な文章」という用例があげてある。この用例のような使い方が一般的である。

遼太郎は、ものの見方にその語を応用したわけであるが、遼太郎によれば、人の文章は人のものの見方の反映であり、文章と人のものの見方は一体的である。遼太郎は「子規は同時代人にとっていちばんやさしい、わかりやすい文章をつくりあげた」¹¹⁾ といい、「子規はなにより、事実についての認識力がつねに明快ですね」¹²⁾ といっている。子規のわかりやすい文章を生むのは、子規の明快な認識力である。子規の主張した「写生」についても、「写生とは、物をありのままに見ることである」¹³⁾ と解説している。

遼太郎の「平明に見ること」は、自己を虚しくし、観念的でなく、客観的にものをありのままに見ることであると思われる。

4. 遼太郎の創作態度と遼太郎らしさ

司馬遷と遼太郎は、「平明に見ること」で共通している。ものを見る目は基本的に同じであるが、その叙述態度はどうであろうか。司馬遷は、「述べる」

ことを意図し、「作る」ことを意図しなかった。この場合の「作る」ことには、その時代を風刺、批判し、さらには理想的な秩序への主張、未来の理想的な政治制度への言及が含まれるようであるが、¹⁴⁾ 司馬遷はそれを否定し、遼太郎にもそのような意図はなかったように思われる。『史記』を題材にし、遼太郎はどのように自分の世界を作ろうとしたのだろうか。

遼太郎は、『項羽と劉邦』という作品に関して、「事歴は『史記』と『漢書』に拠つつも、人間どもを取りまく風習、共通の思考癖、倫理的習慣などについては、当時はこうであったろうというところまで、自分なりに、文献と想像のなかながら、近づいてみた」(下352)という。矢沢永一氏は、この遼太郎の作業を「司馬遷の史眼を通してその奥にある素材を透視し、・・・『史記』の読みもの化や梗概ではない根本からの再構築」(下355)という。

「司馬遷の史眼」とは、「平明に見る」眼であり、客観的に、ありのままに見る眼である。「作る」ことを排して叙述された事歴である。勿論それらは、司馬遷の精神を通過したものであり、司馬遷の主観的な働きによってまとめられたものであって、主観がまったくないとはいえない。しかし自己を虚しくして見つめ、述べられたもので、遼太郎が「酷なほどに冷厳である」といい、「容赦もないほどの露骨さ」でとらえられた事歴である。その事歴を、遼太郎は自分の中に取り込み、想像力をはたらかせて事歴を再構築し、自分の世界として創造した。

そこには、当然遼太郎らしさが出るはずである。その遼太郎らしさを、『項羽と劉邦』という作品のなかに見いだしてゆくことにしたいが、その前に、遼太郎らしさ、その土俗性と合理主義的性格について見ておきたい。

遼太郎らしさは、遼太郎自身についての言葉に見られる。

遼太郎は「実際私は人の口臭のおう、黄塵万丈の雑音が好きで、そこでしか気が落ちつかないのである・・・人の脂ややにのにおいのする猥雑な土地でなければ住む気がしない」¹⁵⁾ という。そこには、もって生まれた大阪人気質がある。その大阪人気質について遼太郎は「この土地に住む男女だけが人種がちがうのではないか」とその奇妙さに辟易しながら、次のようにいっている、

むろん自分への憎しみは、極端な自己愛と背中合わせの物なのかもしれません。いつもなまな欲望をむきだしにして暮らしているこの土地の風景は決して私の美意識に快感を与えないくせに、たとえば、その大阪人の臍物からにおいあげてくる独特のユーモアは、それがあまりにも臍物くさいかゆえに、私はのめりこむような魅力を感じてしまいます。おかしなはなしだと思います。¹⁶⁾

ここには自分もその一人である大阪人のどろ臭い、土俗性の指摘がある。そしてここに見たいのは、遼太郎の冷静な理性的、客観的な分析態度である。人間は矛盾を内包する「おかしな」存在であるが、土俗性とそれに距離を置く美意識と合理的分析力は、遼太郎のもつ二面性である。そして自分を突き放して客観視する冷静な分析で、遼太郎自身にある大阪人の「臍物の臭い」への愛好と嫌悪を浮かびあがらせた、この構図は遼太郎の文学のもつ、遼太郎らしさであり、その特色である。

文学とは、具体性が必要である。描かれた事象が眼前にありありと浮かびあがるようではなければならない。田中・一海氏は、『史記』が「文学の領域に奥深く踏みこんでいる」¹⁷⁾ といっているが、その文学性を強く感じるの『史記』の物語体の部分で、旅行の見聞に基づいた部分であるといっている。その見聞は、「過酷な体験」の後には、いっそうなまなましくなったはずだと次のようにいう、

生きる人間であることを放棄させられた直後から、人間にそそぐかれの眼は異様な輝きをおびたのではないか。かつてはかれ自身もかれの対象とする生臭い舞台にうごめいていた人間のひとりであった。そのころのあらゆる体験——生身身の人間の肉体と精神で体験したもののかずかずは、いまや一種の執念をもって回想され、新たな色と香りさえ附加される。¹⁸⁾

「生臭い舞台」にうごめく「生身身の人間」を「平明に見ること」によって、ありありと、あるがままに描くのが文学であり、これは遼太郎にそのままあてはまる。遼太郎は、「当時はこうであったろうというところまで、自分なりに、文献と想像のなかながら、近づいてみた」という。「臍物の臭い」のするところまで想像し、臭いを嗅ぎ、あるがまま

にとらえようとする。

そしてその事象についての思考は合理的であり、描写は「平明に語ること」を第一としている。遼太郎は、特に理性による合理的判断、合理的思考法を尊重するが、これは「平明に見ること」と密接であり、科学的態度と密接である。

戦後、遼太郎は新聞記者をしていた。新聞社では大学と宗教に関する記事を担当した。大学の記者クラブ時代は、毎日朝の十時から夕方の六時まで大学にいて、自然科学畑ばかり回り、文・法・経畑には行かなかった。自然科学畑の文章を書くことに自信をもっていたようである。

大学の自然科学畑の記者時代に彼の合理主義的、科学的思考法は鍛えられたのは確かであるが、彼の合理的思考法への固執の根は、太平洋戦争体験にあるように思われる。死を待つばかりの戦車の中での思いがその原点であるかもしれない。太平洋戦争は、合理性を全く欠いた戦争であったと遼太郎は考えている。『坂の上の雲』には、次のような文章がある、

すべて、客観的事実をとらえ、軍隊の物理力のみを論じている。これが、好古だけでなく、明治の日本人の共通性であり、昭和期の日本軍人が、敵国と自国の軍隊の力をはかる上で、秤（はかり）にもかけられぬ忠誠心や精神を、最初から日本が絶大であるとして大きな計算要素にしたということと、まるでちがっている。¹⁹⁾

明治の軍人には科学性があり、昭和の軍人には、自他の区別に立って、客観的に事実をとらえ、それを数量的に明晰に測る科学性が次如していたということである。それは、「平明に見ること」の拒否であり、「平明に語ること」の拒否である。合理性をもたないものには、やたらに神秘性をもたせ、煽情的な用語を並べ立てる傾向があり、昭和の軍人がそうであったと次のように言う、

たとえていえば、太平洋戦争を指導した日本陸軍の首脳部の戦略戦術思想がそれであろう。戦術の基本である算術性をうしない、世界史上まれにみる哲学性と神秘性を多分にもたせたもので、多分というよりはむしろ、欠如している算術性の代用要素として哲学性を入れた。戦略的基盤や経済的

基礎のうらづけのない「必勝の信念」の鼓吹や、「神州不滅」思想の宣伝、それに自殺戦術の賛美とその固定化という信じがたいほどの神秘哲学が、軍服をきた戦争指導者たちの基礎思想のようになってしまった。²⁰⁾

昭和の戦争指導者の戦略戦術思想には、物量および技術的側面についての思索が次如し、そのかわりに非科学的な迷信に憑かれ、人道を無視し、合理性を欠いた精神主義がこれらの根幹をなしていた、と遼太郎は説明している。

司馬に見られる経済や技術への関心や合理的説明を大切とする考えの原点をここに見ることができる。しかし経済分析や技術分析や科学的分析を書き連ねたところで文学にはならない。「臆物」が「想像のなかながら」、具体的に「臭い」を発しない限り、文学ではないのは当然のことである。

遼太郎文学の場合、合理性と土俗的な「なまなましき」、その統合に作家としての力量が示されることになり、遼太郎らしさが示されることになる。

次に具体的に作品を読むことによって、遼太郎らしさについて考えてみたい。

5. 『史記』と『項羽と劉邦』に於ける劉邦像

『史記』と『項羽と劉邦』に於ける劉邦像を比較しながら、遼太郎らしさについて考えてみたい。

『史記』は百三十巻52万6500字からなる。司馬遷は、『史記』を「本紀」「書」「表」「世家」「列伝」によって構成している。「本紀」「世家」は国家の、または国家を背負う個人を中心にした編年的な政治史であり、「史」「書」は文化史、そして「列伝」は個人の伝記である。「本紀」と「列伝」が『史記』の中心をなし、この構成は「紀伝体」と呼ばれ、『史記』以後、中国の最も正統的な史書はこの総合的な形式をとることになった。

本稿では、「本紀」の中の「高祖本紀」を中心にとりあげ、『項羽と劉邦』と比較したい。

「高祖本紀」の書き出しは次のようである。

高祖は沛（江蘇省）の豊邑の中陽里の人である。姓は劉氏。字は季。父を太公といい、母を劉媪といた。かつて、劉媪は大沢の堤の上で休息していて眠り、夢のなかで神と遇った。このとき、雷

電があつてあたりはくらくつた。太公が行つてみると、蛟竜が劉媪の上にいるのをみとめた。劉媪はやがて妊娠して高祖を生んだ。

(『史記』上120)

遼太郎も、「沛の町の樹の下で」という章で、劉邦の記述を生地である沛という土地の記述から始めている。遼太郎は、土地と人間の結び付きを重視する。晩年に『この国のかたち』（平成2年～平成8年）というエッセイ集があるが、この標題の「国」を「土地」とし、「くに」と読ませることに固執した遼太郎には、まず土地というものが強く意識されていたのだろう。それは、膨大な『街道をゆく』シリーズ（昭和46年～平成8年）が長く継続して書き継がれた原因の一つだと思われる。『街道をゆく』は、土地と人間との関わりを書き続けたものだからである。また遼太郎自身が自分自身の中にある「大阪人気質」を意識し、分析していたことにも示されている。

『項羽と劉邦』では、この沛の説明の前に二つの土地に関する重要な説明があり、いずれも遼太郎らしさを示すものとなっている。

まずあげたいのが、秦という国家についての説明である。司馬遷は、「秦始皇本紀」に於いて、秦が強大になった理由にその地勢をあげ、「秦の地は山あり河あり、それを固めとした、四方を自然の要害にかこまれた国である。・・・その地勢が諸侯の雄たらしめたのである」（『史記』上92）と述べている。遼太郎は、地勢というよりも土地の成り立ちが、軍事面だけでなく秦という国の政治と文化の根本を形成し、さらには始皇帝の精神を形成したと考えている。遼太郎は、秦について次のように説明している。

・・・秦は中国大陸の西北角にあり、半農半牧の非漢民族が雑居している。これらを統御するには法律と刑罰と鞭による統制主義による以外になく、秦は早くからその方式を採用し、法家の国とされた。秦は中原に熟成しつつあったような人文には乏しかったが、そのかわり、西方の遠い道からつたわってきている鉄や銅、あるいは真鍮の冶金が上手で、地をふかくうがつ農具も、するどい兵器も他の六国（楚、齊、燕、韓、魏、趙）にくらべてはるかに豊富であった。（上13）

僻地であることが、雑人種の混交を生み、文化を生み、技術の流入を生み、統制主義を生み、優秀な農具や兵器を生み、高い生産力を背景として、自然の要害という不自由さを利点に換えて、秦は軍事大国になっていったという解釈である。

土地の性格は人間形成にも影響を与え、秦の始皇帝は「人文の稀薄な西北の辺疆の人だけに瑣末な文化意識にわずらわされることがなく、かえって合理主義的な思考法をとることができたし、おなじ理由で、一種の科学主義者でもあった」（上14）という。「前代未聞の土木狂ともいべき始皇帝」（上55）というのも同じ性格分析からきている言葉である。司馬遷にこういう表現はない。

項羽の人格分析についても、土地との関わりを重視した説明をしている。項羽について物語る「江南の反乱」の章は、まず項羽の生まれる「江南」という揚子江以南の地の歴史的、地理的説明から始まる。北方の中原（黄河流域）の漢民族との比較を言語、風俗、生活様式に関して行い、江南の人々が蛮族として「荆蛮」と呼ばれたと述べている。江南の蛮族は漢民族とは異なり、感情が豊かで、激情家が多く、戦い方では「勢いづけば火を噴くように剽悍に戦うが、戦術性が乏しく、戦勢が困難になると士気沮喪してくずれやすい」（上44）と説明する。江南の楚は、秦に悲惨な形で滅ぼされ、秦に対する復讐心をもっている。「三戸といえども、秦を滅ぼすものは必ず楚ならん」という言葉が、当時はやった。項羽は、その楚人である」（上45）と遼太郎は述べる。項羽は、楚人の歴史的、地理的、民族的性格を負う存在であるという書き方である。

次にあげる、土地と関連させて項羽とその宿敵劉邦を比較した部分は、遼太郎の対照させることによって鮮明な印象を与える手法という面でも、遼太郎らしさが出ている。

項羽の羽は字（あざな）のほうで、名は籍である。この点、「荆蛮」である楚人ながら、中原の漢民族の命名法による名をもっている。やがては項羽の敵になる漢の劉邦が、漢民族の居住地に生まれながら、僻地のせいからくに字も持っていなかったことを見ても、項羽が荆蛮とはいえ中原の文化を十分に受容していた家の子らしいことがわかる。むしろ荆蛮の良家のほうが中原の文化を濃く受け、中原でも、劉邦のような田舎で生れると、中原紳

士としての装飾が稀薄であるのかもしれない。この他人種が混住している大陸にあっては古来、人種論は問われず、中原の文化にさえ参加すれば、すでに「蛮」ではないとされた。(上48)

項羽は楚の貴族の出身であり、中原の文化的教養を備えていた。楚人の感情の豊かさや起伏の激しさや蛮性も備えていた。遼太郎が『史記』にも出ているという、引用した言葉「彼取ツテ代ルベキナリ」(上13)は、項羽の特徴をよく示している。秦の始皇帝の巡幸を目にして項羽が思わず本音を漏らした言葉だが、遼太郎は対照のために劉邦の始皇帝に対する言葉「当ニ比ノ如クナルベキナリ」(上12)を同時に引用することを忘れていない。「劉邦は皇帝に対して無用に戦闘的な抵抗心はもたず、ただむやみにくびをふってうらやましがった。このあたりは、いかにも劉邦らしい」(上12)と遼太郎はいう。項羽は貴族の出身らしく自負心が強く、過激な性格をもっていることが、遼太郎の説明でよく理解でき、劉邦がそれと対照的であるのも、よく推察される。

以上のように、遼太郎は秦という国家、始皇帝、そして項羽と土地との関係の深さを指摘している。ここで、「高祖本紀」の冒頭の描写に戻りたい。

この冒頭について、遼太郎は司馬遷に当惑があったのではないかと推察している。漢帝国の始祖には似つかわしくないからである。神聖さが露ほどもないのである。しかし司馬遷は「容赦もないほどの露骨さで書いている」(上75)と、遼太郎はいつている。そしてどのように「露骨」であるのか、遼太郎は分かりやすく解説している。

劉の家の者は、漢民族ならだれでも持っている名や字をもっていない。漢民族とはいえ、中原の文化が稀薄だったからである。「劉邦」の「邦」は「にいちゃん」という意味で、「劉邦」は「劉兄哥(あにい)」である。司馬遷は、劉邦の字が「季」であると書いている。「季」は「末っ子」である。父親の「太公」は「じいさま」、母親の「媪」は「ばあさま」である。遼太郎は、馬鹿々々しいような名前を大まじめに述べたてる司馬遷の本音を押し量りながら、「かれの観察態度は、酷なほどに冷徹であるといっている」(上75)と述べている。そして遼太郎が劉一家に名がないことに見いだしたものは、劉邦の生まれた「中陽里という土くさい村のふんいき」(上76)である。土俗性である。

氏名の説明の後、司馬遷は劉邦が「竜の子」とであると述べる。田中・一海氏は、『史記』は「当然のこととして、人間の歩んだ足跡を正しく歪めずにあとづけようとする。そのためには、まず超自然的非理性的な事件は極力排撃する」²¹⁾と述べている。司馬遷は、普通の中国創世記に語られる「三皇」を排し、「五帝本紀」から始めた。そこで、当時の知識人は『書経』に書かれている堯・舜以後を語るのに黄帝には触れないけれども、旅行した時に黄帝を堯・舜と共に称揚するのに接したことがあるので、資料の確かなものを選んで黄帝から書き始めると述べている(『史記』上16)。

第2章に於いて貝塚茂樹氏の言をかりて、『史記』が「科学的な歴史叙述」を目指していると述べたが、司馬遷に現代の科学思想があったというのではない。叙述の態度が事実と正確に忠実に客観的であろうとするという意味である。その土地で信じられていることであれば、それは事実であり、そのまま叙述されることになる。劉邦がその土地の人々に「竜の子」と信じられているのであれば、それは事実である。司馬遷もそう信じていた。しかし遼太郎は現代の人であり、たやすく受け入れることはできない。しかも現代人に語りかけるものである場合に、単に「竜の子」であったとは書けない。

遼太郎は、劉家の人間に名がないことに「土くさいふんいき」を見いだした後、「この時代、中陽里あたりではなお古代以来の大らかな自然さがつづいていて」(上77)、男女の性の倫理もやかましくなく、夫以外のもの(竜)の子を生むことがあったと言う。神がまだいたるところにいた時代だから、と言われれば、そうかなあと思わせるが、現代人には納得がいかないものが残る。それに遼太郎自身も気がついて、「蛟竜とは、あるいはよそから流れてきたやくざ者かもしれない、おそらくそうであろう」(上77)と書くのを忘れない。さらには、父親の劉邦に対する態度に「驕」があったと言い、そこに冷たい関係が生じたと言う。ここに鋭い遼太郎の現代性がある。しかし「驕」に触れながら、劉邦が「竜の子」であることが気に入っていたふしがあると付け加え、「おおらかさ」や「明るさ」を基本的には遼太郎が志向していることが分かる。

劉邦が生まれたと聞いた後、司馬遷は続けていう、

高祖の人となりは、鼻が高く竜顔で、美しい須

髻をしており、左の股に七十二の黒子があった。情ふかくて人を愛し、施しを喜び、からっとしていて心はいつもひろく、家の仕事などにはこだわらなかつた。(上120)

これは、高祖についての体裁のよい説明である。司馬遷は、「家の仕事などにはこだわらなかつた」と書いたが、遼太郎は畑仕事で父親たちが疲れきっていても知らぬ顔で沛の町に出かける「ろくでなし」(上78)と書いている。沛の町には商人がおり、賭場や酒場があり、娼婦がおり、劉邦の大好きな盗賊もいた。そこは劉邦の世界で、遼太郎の嫌悪と好意の入り交じった大阪人の「臍物くさい」土俗的世界と似通っている。遼太郎は、「人の脂ややにのにおいのする猥雑な土地」である大阪の土俗的世界の延長上に沛の町を見透し、「臍物くさい」人間たちとして劉邦たちを自然に描き出したように思われる。

遼太郎は、土俗性と合理性を愛する。土俗的世界に「のめりこむような魅力を感じ」、その世界を合理的に分かりやすく説明することによって、この相反する二面性の均衡が保たれている。72個の黒子についての論理的説明は、遼太郎のその特色をよく示している。上記にあるように司馬遷はまったく説明がなく、ただ「竜顔」をして、黒子が72個あったと言うに過ぎないのだが、それだけのことを、遼太郎は、劉邦が口臭を放ちながら、そこにまなましくいるように描き出すと同時に、現代人に分かりやすいように論理的に説明していく。

村では暗い面ももっていた「竜の子」という出生の秘密を、劉邦は「大法螺のたね」(上79)にして自分の世界を拡張していく。劉邦は人の集まりの中で裸になり、黒子を数えさせる。うまく数え切れないところに、劉邦は「七十二個だ」と断定する。根拠は、生まれた時から72個あり、村人が数えたから確かだと言い、なぜ72個あるのかということについては、「赤竜の子だからだ」と言う。それで分かったはずだという意味である。

なぜ分かったことになるのか? それについて、遼太郎は二つの解説をする。一つは当時の陰陽五行説と暦法の解説である。「72」という数字と「赤」がそれらの説によれば、特別な人間を示すことになるという解説だが、そこでの遼太郎の特色は、それぞれの根拠に説明のつかぬものがあると指摘している点である。一年は365日、それを五行説の5で

割れば、72となり、だから特別な人間だという根拠もないし、「72」という数字は五行説の「土」だということも、なぜなのか証明不能である。「哲理はそのあいまいさの上に成立する」(上80)と遼太郎はいう。「土」は「赤」となり、「なぜ土が赤であるのか、論理はそこでゆきどまりになる。このことは公理ともいうべきもので、証明はできず、証明ができないために、ひらきなおったように絶対の真理とされ」(上81)てしまうのである。「赤」は、出生の噂話の「竜」に結びつく。当時の真理とされた陰陽五行説に裏付けされた「赤竜説」を否定する人間は沛の町にいなかった。

遼太郎は、陰陽五行説の成立には普遍的な一面があると、次のようにいう、

・・・人類は、その後も多くの体系を創り出し、信じてきた。ほとんどの体系はうそっぱちをひそかな基礎とし、それがうそっぱちとは思えなくするためにその基礎の上に構築される体系はできるだけ精密であることを必要とし、そのことに人智の限りが尽された。(上81)

「うそっぱち」を基礎とした体系の中に、遼太郎は太平洋戦争時代の日本軍部の「神州不滅」思想を含めていると思われる。または、逆にその戦争体験があったゆえに、このように思想体系の基礎に「うそっぱち」を見る考え方もつようになったとも言える。

劉邦の「赤竜の子」説を納得させる第二の解説は、その説の実証として劉邦の顔があったというものである。司馬遷は、「鼻が高く竜顔で、美しい須髯をしており」と描写しているのを、遼太郎は次のように書いた。

まず、眉の骨が高く、それがまるく弧を描いている。顔はぜんたいに中高で、鼻柱においていっそう隆くなっており、鼻の肉もたっぷりついていてよく伸び、そのすがたが心地よい。竜の顔であった。(上82)

遼太郎らしさは、これらの言葉の後に「もっとも、竜がどういう顔をしているのか、たれも見た者はない。竜を見なければ劉邦の顔を見よ、と言われれば雷電に打たれたようにそう認識するしかなかった」

(上82)という説得のからくりを説明する言葉を付け加えたところにある。髭についても「そのようなつもりで見ると、あるいはそう見えなくもない」と付け加えている。これらの言葉によって、即物的に、よく言えば科学的になっている現代人も、なんとなく頷いてしまうように思われる。

「竜顔」に続いて司馬遷は、「情ぶかくて人を愛し、施しを喜び、からっとして心はいつもひろく」と書いたが、遼太郎の劉邦は賭博をやり、盗賊をやり、生業をもたず、無一文で大酒飲みで、「あふれ者」や「無頼の徒」や「こそ泥」たちと付き合い、親分となっていく。矢沢永一氏は、『項羽と劉邦』が「人望」についての考察だという(下362)。劉邦の「人望」の形成の根底にあるのは、沛という土地であると遼太郎は考えている。

「沛は中原の南のはずれ、楚の北のはずれ。こんな気分のよい町はない」(上86)。と人々が言うのは、遼太郎によれば、戦国の諸勢力の影響が稀薄で、沛地方には「太古以来ののびやかな気風」(上86)が残っていたからである。この気風を劉邦は、自分の性格の根本にもっている。そういう意味では、劉邦は沛の典型的な人物である。

沛地方の気風を示す劉邦の性格について遼太郎は、「寛容さと気前のよさという劉邦の特質」(中42)といい、「劉邦の場合、小さな我を、うまれる以前にどこかへ忘れてきたようなところがあつた」(中28)といい、「劉邦は空虚だ」(上131)という。そして「自分をいつでもほうり出して実体はぼんやりしているという感じで、いわば大きな袋のようであつた」(中171)といっている。「大きな袋」には有能な人間がどんどん入って、自分の能力を存分に発揮できる。劉邦はその力を使えばよい。遼太郎は、「本来、抛って立つべき何も持たなかつた劉邦がなぜ大組織をなしたのであろう」(中10)と問題提起しているが、その答えを沛の町の「ろくでなし」たちとの繋がりとして説明している。

その繋がりを遼太郎は、「侠という相互扶助の精神を糊として結びついている」(中13)という。この結びつきに考え合わせるべきは、「食が英雄を成立させた」(上200)という遼太郎の言葉である。混乱の時代に人を集める力は、食わせる力である。遼太郎は、「流民のめざすところは、理想でも思想でもなく、食であつた。大小の英雄豪傑というのは、流民から推戴された親分を指す。親分——英雄——

は流民に食を保障することによって成立し」(上197)とも述べている。遼太郎は、「あとがき」で、1975年に遼太郎が洛陽で穀物倉を見た時に、流民と食についての思いに至ったことに触れ、「中国の政治は、ひとびとに食わせようということが第一義になっている」(下347)と述べている。

食と英雄と人の結び付きの原点は、沛の町にある。「臙物のにおう」沛の町にある。土俗の中に原点があることを遼太郎は、次のようにいう、

・・・劉邦という男は・・・この大陸の土俗のなかから生まれ、土俗という有機質を、育ちのよさや教養で損ねたり失ったりすることなく身につけ、文字どおり裸のまま乱世の世間に出た。・・・ただ土俗人として思考し、ふるまい、平素、外見は百姓おやじのように茫々としていた。

劉邦はただ、

「おのれの能くせざるところは、人にまかせる」という一事だけで、回転してきた。劉邦は、土俗人ならだれでも持っている利害得失の勘定能力をそなえていたが、しかしそのことは奥に秘めて露にせず、その実体はつねに空気を大きな袋でつつんだように虚であつた。(中48)

遼太郎のいう「『おのれの能くせざるところは、人にまかせる』という一事」については、司馬遷も劉邦が天下を取った所以であると考え、項羽が天下を失ったのは、項羽が「賢者を妬み、能者を嫉み、功ある能者は害めつけ、賢者に対しては疑いました」(『史記』上134)といつて、項羽による劉邦と正反対の行為が原因であるとしている。しかし司馬遷には土俗性を見る視点はない。遼太郎は根本の「一事」についても土俗の中にその根を見る。遼太郎の描写によって、我々には、沛地方のおおらかな「土くさいふんいき」や、その具体的な姿としての劉邦が浮かび、そこからすべてが始まっていると理解される。

6. おわりに

劉邦と秦の関係について、遼太郎は次のように書いている、

秦は、法で治めた。その法は煩瑣できびしく、秦政権そのものが罪人の製造機械のようなところ

があった。この大陸の住民たちは、自然の循環のままに身をゆだねていることが好きで、元來法という人工の大綱のなかで拘束されることを好まなかった。法治というのは、食糧の豊かさと平和を前提とする。兵乱と飢饉というせっぱ詰まったこの状況の中では生存のためについ法を犯さざるをえず、そういうことでいちいち官吏にえりがみを掴まれては生きてゆくことができなかった。劉邦には、この機微がからだでわかった。(中81)

劉邦は、秦の法を撤廃した。ここに「大陸の住民たちは、自然の循環のままに身をゆだねていることが好きで」とあるが、これは劉邦の好みであり、劉邦の人間について「生まれたままの中国人」(中47)と言われることの説明の一つとなるだろう。

劉邦は、秦の時代に生まれた「時代の子」である。「時代の子」ではあるが、同時に中国人の愛する普遍的な人間性を備えていた。秦という独特の国家に劉邦という人間が生まれ、「人望」を集めてゆくことができた所以は、そこにある。

田中・一海氏は、『史記』を読み、劉邦の特質をまとめあげている。²²⁾ それによれば、劉邦の特質としてあげられるのは、まず「寛仁大度」である。これは「高祖本紀」の冒頭部分に述べられているもので、劉邦の基本的な性格である。ひろい愛情とおおらかな度量であり、すべてをあるがまま受け入れる態度である。遼太郎は「大きな袋」という具体的イメージを与えた。第二は、否定的側面で、「粗野野蛮」、「無礼、不作法」である。さらに「儒者ぎらい」、「無限大の自負」、「執念・非情・猜疑」などの狭量な面もあると指摘されている。

ここに指摘された否定的側面も劉邦の一部であることはまぎれもない。遼太郎は、劉邦を描くにあたり、司馬遷が描き、田中・一海氏の指摘した劉邦のさまざまな側面の根拠を、劉邦の故郷の沛地方に、その土俗性に置いた。劉邦の肯定的側面も否定的側面も、すべて沛を根拠にし、沛から生まれ、劉邦に於いて統合されているのである。それが、遼太郎の「再構築」であった。

遼太郎は、沛という土地に生まれ、その土地に育まれた、土俗的な人間としての劉邦を、できるだけ平明に分かりやすく、論理性を加えながら、ありありと「臍物くさい」ほどに具体的に描き出そうとしたのである。

注

- 1) 司馬遼太郎：項羽と劉邦，下，35，新潮文庫。以降の（ ）内の文字と数字は本書の巻数と頁数を示す。
- 2) 田中健二，一海知義：史記，上，18，朝日選書，東京，1996。
- 3) 田中・一海，上，8。
- 4) 司馬遷，(野口定男訳)：史記 中国古典文学体系12，下，348，平凡社，東京，1971。本論中，本書よりの引用には（ ）内に本書名と巻数と頁数を記す。
- 5) 貝塚茂樹：司馬遷，28，中央公論社，東京，1978。
- 6) 斎藤慎弥編：司馬遼太郎の世紀，40，朝日出版社，東京，1996。
- 7) 世紀，40。
- 8) 世紀，40。
- 9) 司馬遼太郎：竜馬がゆく，3，165，新潮文庫。
- 10) 司馬遼太郎：坂の上の雲，2，124，新潮文庫。
- 11) 週刊朝日編集部編：司馬遼太郎が語る日本，II，206，朝日新聞社，東京，1997。
- 12) 司馬遼太郎が語る日本，II，70。
- 13) 司馬遼太郎が語る日本，II，206。
- 14) 貝塚茂樹，27。
- 15) 司馬遼太郎：足跡，司馬遼太郎の世界，285，文芸春秋社，東京，1997。
- 16) 司馬遼太郎の世界，283。
- 17) 田中・一海，上，438。
- 18) 田中・一海，上，27。
- 19) 坂の上の雲，3，126。
- 20) 坂の上の雲，3，185。
- 21) 田中・一海，上，19。
- 22) 田中・一海，中，470-9。

(受理 平成10年3月20日)